

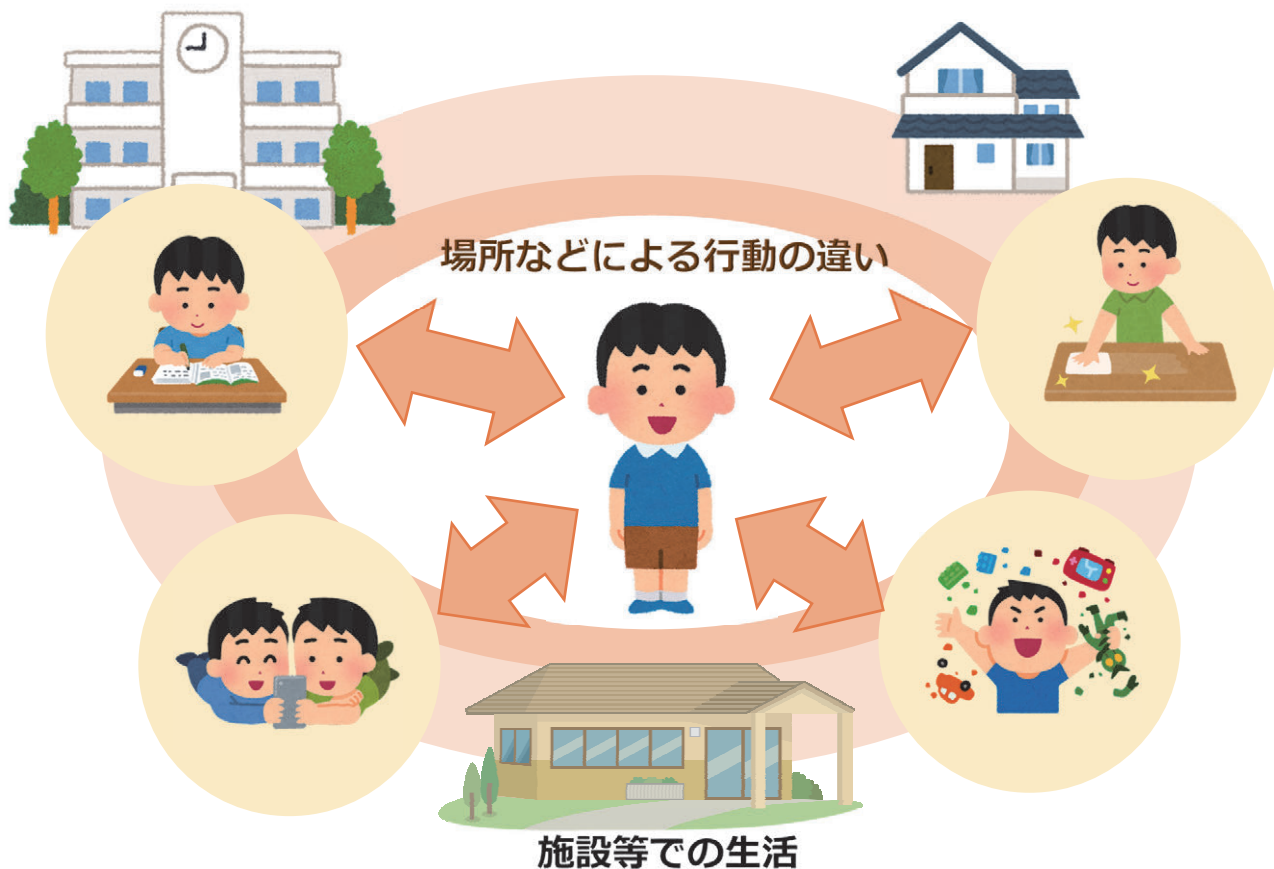
ソーシャルスキルトレーニング（SST）に取り組んでいる事業所が、その効果を高めるために取り組んでいる工夫について、事例を踏まえて紹介します。

### 子どもの理解に多様な視点

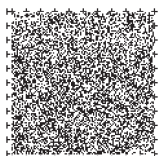
- ✓ ソーシャルスキルトレーニングを実施する上で、子どもに関する情報を整理し、子どもを理解することは大事な点です。
- ✓ 子どもは、場所や相手によって、状況は同じでも行動が異なることがあります。
- ✓ その行動を正しく理解するためには、一人の職員や一つの環境からの視点だけではなく、複数の視点から子どもの行動を解釈していくことが必要です。

#### 学校での生活

#### 家庭での生活



様々な環境での子どもの生活状況を踏まえた上での分析が、  
子どもを理解するために役に立ちます。



## 取組事例①

### 学校と連携した情報共有

#### <学校生活との連続性が課題>

- 生活の大部分を占めている学校と福祉施設の間での情報共有に、施設によって差があります。
- 学校で作成している教育支援計画は、学校職員をはじめ多職種による視点が反映されていて効果的な情報です。

#### <保護者や自治体の仕組みを通じた情報共有>

保護者の協力を通じて、学校における教育支援計画や生活状況、生活能力の評価を把握することで、子どもの行動や施設での活動に求めていることなどへの理解が深まった。

区市町村が設置している自立支援協議会や、事業所連絡会などの場で、他の障害児支援事業所等や学校関係者と情報共有を行った。

**⇒保護者や連絡会などを介することで、情報の「量」を増やす**

## 取組事例②

### アセスメントやプログラム開発に専門家の視点

#### <職員人数・専門性のバリエーションが課題>

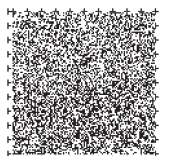
- 障害児支援事業所等の多くは、定員が10名以下の小規模な施設となっており、職員も少人数による体制がほとんどです。
- 職員の職種についても、児童指導員や保育士が中心となっており、専門性が偏りやすい傾向にあります。

#### <事業所で活用するツールに専門家による助言を反映>

独自のアセスメントツールに、研究者等のアドバイスを反映したことで、職員だけでも簡易かつ効果的なアセスメントを行えるようになった。

SSTのプログラムを検討する際に、研究者等にアドバイスをもらって改善点などを相談することで、専門的知見を踏まえたプログラムを提供できた。

**⇒外部の専門家と協働することで、情報の「質」を向上する**



## 事業所全体でつくる SST に適した療育環境

- ✓ ソーシャルスキルトレーニングを実施する上で、実践者（支援者）や実践の場（事業所）と、子どもの信頼関係は不可欠です。
- ✓ 実践者によって子どもに求めることが異なっていたり、SST のプログラムを行う時間と、それ以外の時間でルールや雰囲気が大きく異なってしまうと、子どもの混乱の原因となってしまいます。
- ✓ 事業所全体の療育方針と SST のプログラムの方向性に、一体感をもたせることが必要になります。

### 職員による指導の違い

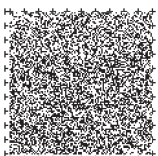


### 唐突な場面の切り替え



安定しない環境は混乱の原因

子どもが安心して、かつプログラムに好奇心を持って取り組めるように、  
普段の療育環境を調整していくことが、SST には効果的です。



### 取組事例③

### 職員の行動規範の統合

#### <職員それぞれで規範が異なる>

- 療育方針がある一方で、不適応行動への指針がない事業所が多く、具体的な子どもの行動に対する反応が、職員それぞれに委ねられている場合があります。
- SST は自己肯定感や本人のモチベーションへの働きかけが重要なため、職員による指導基準を一定水準に保つことが必要です。

#### <ガイドブックや合同研修による平準化>

機械的な支援や虐待につながるような支援の具体例をまとめたガイドブックを作成することで、新任職員でも事業所が大事にしている規範を理解しやすくなった。

SST を実施していない職員やパート職員も参加可能な研修会を企画して、事業所のあらゆる職員が SST の考え方を理解できるようにした。

**⇒共通のテキストや学習機会で、職員間の考え方を共有・統一化する工夫**

### 取組事例④

### 療育環境の全てに SST の考え方を導入

#### <子どもの生活のいたるところに SST の必要な機会>

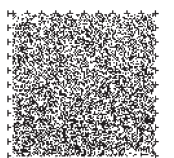
- 障害の程度や年齢の幅が広いなど、様々な状態像の子どもがいる障害児支援事業所等では、生活の様々な場面で子ども同士のやり取りが発生しています。
- プログラムによる介入だけではなく、他の療育環境の中でも職員による介入を行うことで、スキルを身につける機会を増やすことができます。

#### <普段の関わりの中でモデリングやロールプレイの実施>

友だちに言葉でうまく伝えられない子どもに対して、職員が見本を示して子どもが模倣することを繰り返し、職員がいなくても言葉のやりとりができるようになった。

子ども一人一人の目標を個別支援計画で明確に定めることで、生活の中で課題が表出したときに、職員が介入のチャンスを見逃さないようにしている。

**⇒普段の療育環境の中でのやりとりから SST の介入機会を増やす**

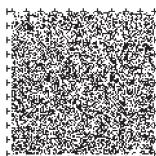


## 地域と一緒に取り組む SST

- ✓ ソーシャルスキルトレーニングによって子どもの成長を促すためには、通所が中心となっている障害児支援事業所等の中で過ごす時間だけでは十分ではありません。
- ✓ ソーシャルスキルは、実際の生活の場の中心となる、「家庭」や「地域」の中で発揮できるようになることが目標の一つです。
- ✓ そのためには、障害児支援事業所等で実践している内容を、家庭や地域と一緒に取り組んでいくことが必要になります。



障害児支援事業所等での経験や体験を、  
家庭や地域に拡充して実践していくためのサポートが大事。



## 取組事例⑤

### 家庭への情報提供の充実

#### <保護者の関心と理解を高めることが必要>

- ソーシャルスキルは、普段の家庭や地域の中での生活で実践・発揮できることが目標の一つであるため、その状況を把握可能な保護者に、SSTに関する関心と理解を持ってもらうことが重要です。

#### <保護者に事業所内の活動を見てもらう>

プログラムを保護者が見学できるようにし、実施後にプログラムの内容や目的を保護者に対して説明するところまでをSSTの一環として実施している。

3か月に1回の頻度で、個別支援計画の目標の達成状況を評価して、保護者に対して子どもの状況を共有している。

⇒**保護者との顔が見える関係を重視する工夫**

## 取組事例⑥

### 地域を巻き込んだ療育環境の提供

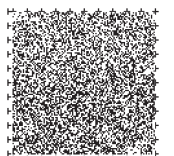
#### <地域との接点の少なさ>

- 普段の生活の中で、地域の人と接する機会は時代の変化とともに変わってきています。特に近年はデジタル技術の普及により、人と接することなく様々なサービスが利用できるようになっており、対人スキルを身につける機会が減ってきています。

#### <地域の中での体験機会の拠点となる活動>

子どもと一緒に地域の清掃活動を行い、地域の人と交流する機会を創出するとともに、地域の役に立っているという達成感を子どもに感じてもらう機会としている。

⇒**地域の中や、地域の人と関わりながら体験・経験を積める機会の創出**





障害児支援事業所等におけるソーシャルスキルトレーニング実態把握調査～結果概要・事例集～

登録番号 (3) 424

令和4年3月 発行

編集・発行 東京都福祉保健局障害者施策推進部計画課

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話 03-5320-4142 (ダイヤルイン)

ファクシミリ 03-5388-1413

印刷 音羽印刷株式会社

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。



